

LEADERS NOW!



武市 広紀—たけいち ひろき
 ■1997年、熊本県玉名市生まれ。2019年NHK大河ドラマ「いだてん」の主人公の一人、金栗四三氏の母校・県立玉名高等学校卒。1年次より関西大学ボランティアセンターに所属し、17年11月から翌18年11月までの1年間、学生スタッフの代表を務めた。

つながりを生む ボランティア活動

学生生活の充実をサポートする

●文学部 4年次生
武市 広紀 さん

関西大学ボランティアセンターの学生スタッフは、教職員とともに活動している。学生スタッフが企画・運営した活動は学内外で広く認知され、年々、評価や注目度も高まっている。代表を務めた武市広紀さんは、ボランティア活動の魅力を広めるとともに、運営の改革を進めた立役者だ。

「新しいことをしたいとは思っていましたが、そこまで乗り気ではなかったんです」。1年次生の時、友達に誘われてボランティアセンターが主催する体験ツアー「淀川掃除」に参加した武市さん。当時は、ボランティアに対して「偽善的」「無償の奉仕で行わなければならない」とマイナスイメージを持っていたと言う。けれど、参加してみると学部、年齢、性別を問わず、さまざまな人たちと交流しながらの作業は楽しく、大いに刺激を受けた。地域の方からも「ありがとう」と声を掛けられ、「いい活動だな」とボランティア活動に対するイメージは一変。今度は自分が誰かにきっかけを与える立場になりたい。そう思い、学生スタッフになることを決めた。



ボランティアセンターでは、約100人の学生スタッフが5つの班に分かれてボランティアの企画・運営、コーディネートをしている。主催するボランティア体験ツアーは、清掃や地域活性化、環境保全など多種多様。「千里キャンドルロード」や「飛鳥光の回廊」などの地域連携イベントに参加した学生から「こんなに楽しい活動がボランティア?」とよく言われます。ボランティア=大変、堅そうなどというイメージが変わるきっかけになるので、私たち学生スタッフにはうれしい反応です。普段関わる機会の少ない人と人、地域がつながる場を築き、大学生活をより充実させるためのサポートができるので、やりがいは大きいです。

2年次生の時、武市さんは学生スタッフの代表に選ばれた。快諾したものの、当時在籍していた80人の学生スタッフをまとめ、企画を推進することは想像よりもはるかに難しかった。「新しい試みの多くは失敗。常に案を10個程度用意して、ダメなら次!とどンドン試しました。何より、スタッフが新しいことに前向きにチャレンジできる団体作りに励みました」と屈託なく笑う。毎週のミーティングでは、各班の活動内容や進捗を発表するようにし、アプリを使って情報共有を徹底。ボランティアの募集内容も、全員が把握できるよう工夫を重ねた。「自ら行動しなければ人を動かすことはできない」。まず自身が率先して案を出し、幹部で話し合ってみるに伝え、納得してもらうことができたなら即、実行。このスタイルは後輩にも受け継がれ、ボランティアセンター公式Instagramのアカウント作成につながったり、学生スタッフの活動場所を移転したりと、積極的な取り組みが今も進んでいる。



一方、活動で印象に残っているのは18年の「大和川大掃除」。関大生と体育会各クラブ、教職員、ミズノ株式会社が連携する500人規模の活動で、この年、6年間続けた「淀川大掃除」から活動の地を移した。これまでの活動が実を結び、淀川河川敷のゴミは減少。他の河川の美化にも取り組みたいと考えたのだ。関係者への説明、活動エリアの地理や立入不可エリアの把握、学生スタッフの配置……。準備には約5カ月を要した。「大変だったぶん、当日の達成感は格別でした。参加者も大量のゴミを見えますますやる気がでて、生き生きとした表情で作業していました」。みんなが交流している姿を見て、ボランティアの魅力が伝わったという手応えを感じながら、「幅広い層の人たちとのつながりを自ら生み出し、自身もつながることが出来たのは得難い経験。社会人になってもボランティアを見つめ、携わり、その体験をアウトプットし続けたいです」。武市さんの挑戦は、これからも続いていく。

トレンドを通じて 時代を書く

流行から透ける真実に迫る女性記者

●株式会社朝日新聞出版アエラ編集部 記者
福井 しほ さん —文学部2016年卒業—



福井 しほ—ふくい しほ
 ■1993年、大阪市生まれ。私立四條畷学園高等学校卒。2016年関西大学文学部卒。同年株式会社朝日新聞出版入社。営業本部販売部、デジタル本部AERA dot.編集部を経て19年4月よりアエラ編集部配属。趣味は音楽鑑賞、読書

伝説的ギャル雑誌の復刊、世界の教育現場、Instagram、Facebook、Twitter、LINEなどのSNS事情—。時代を彩るトレンドに迫り、見え隠れする人間心理と時代のニーズを記事にする福井さん。関西大学タイムスで磨いた取材力と行動力、そして感性を最大限に発揮して「時代」を追い掛け、記している。

訪日外国人でにぎわう築地市場の目と鼻の先—。アエラ編集部がある朝日新聞東京本社で「黒×赤」に身を包んだ福井さんは「東京は人が多くて、ザワザワして好きですね」と話した。庭のように慣れ親しんだ大阪屈指の商店街・千林商店街を懐かしむようにはにかんだ。入社3年目に肩書きはAERA dot.編集部記者に、4年目の2019年4月からアエラ編集部記者に。ラテン語で時代を意味する「AERA」は、平成になる前年の1988(昭和63)年5月創刊、センセーショナルなダジャレ交じりの1行コピーとともに8万部超の発行部数を誇る国内有数の週刊誌だ。



「今はSNS系のテーマが多いです。ハッシュタグ(#)検索をする時、TwitterとInstagramでは同じ「タグ」と「手繰り寄せる」を掛け合わせた言葉」手段でも文字数制限があるかないかによって使われ方が違うなど、取材を通じて初めて気付かされることも多いです」と福井さん。本筋とはそれた話をクローズアップして全体像を彩る哲学的な国語教師、一つ一つの言動を納得するまで深掘りする同級生



と出会った高校3年間で「自分の価値観を最も変えた時代」と言う。パンカな学風に憧れて入学した関西大学では、黒ペンで殴り書きしたような立て看板に引かれ、関西大学タイムスの扉をたたいた。「編集長と2年次生が1人の計2人しかいなくて、1年次生は私ともう1人の男子学生だけで……。取材、記事作成、入稿の繰り返しでした」。2014年1月に学内で開かれたソチ冬季五輪フィギュアスケート男子代表の高橋大輔選手、町田樹選手の壮行会では、予定稿(事前に準備した原稿)に当日の写真を添え、大学周辺のコピー店で印刷した「号外」を配布。一問一答の全文掲載がファンの中で話題となり、問い合わせが相次いだ。「紙面レイアウトもサイトデザインもシンプルですが、見てくれる人がいることを凄く実感しました」。五輪直後に編集長に就任すると、赤字打破を目標に掲げた。親しみやすさとお得情報満載で、1万人超に倍増させた公式Twitterのフォロワー数を交渉に用いるなど、広告営業でも手腕を発揮した。



2013年11月発行の「関西大学通信」第427号、「関大生なんでもMy記録」。18組20人の関大生が持つユニークな記録を数字でクローズアップする見開き特集に、2年次生で登場した福井さんの記録は「80人」。黒地に白の水玉(ドット)柄のワンピースに赤のカーディガン、そして黒の靴。関西大学タイムスを両手に、はにかんだ表情で「1年間で80人の取材をしてきました。文章を書くことが好きで、そのことが生かせるサークルを探していた時に『関大タイムス』と出会いました。(後略)」。6年後の今、元号は平成から令和に—。当時と変わらぬ勝負カラーに身を包み、当時とは「責任の重さが絶対的に違う」プロフェッショナルとして、トレンドから見え隠れする真実に迫り、【福井しほ】の署名入りで「時代」を記している。